

---

# マイホーム

伝次郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マイホーム

### 【Nコード】

N0691P

### 【作者名】

伝次郎

### 【あらすじ】

結婚を控えた二人が訪れた住宅展示場。モダンな家が並ぶ中、古ぼけた家が一軒だけ建っていた。「幸福の家」と書かれたその家に入ろうとして、案内人に呼び止められる。この家は、幸せではない者、または家庭を壊そうとする者を呑み込んでしまうという。二人は自分たちの幸せを確認するため、その家に飛び込んでいった。

## 第一章

カラリとした快晴の、初夏の日曜日。

今日はいつものデートコースではない。マイホーム展示場の駐車場に車を止めた遠野伸介は、彼女をエスコートするように助手席のドアを開けた。

車から降りた亜紀子の顔は、晴れやかな笑顔で満たされている。それもそのはず、一週間後に伸介との結婚式を控えた、恋人同士として最後の幸せなデートの真つ最中なのだ。

一週間後　それから先は、彼でも、彼女でもない。

夫婦として、新しい人生のスタートを踏み出さなければならぬのだ。

「あなた」なんて呼べるのかしら。彼は私のことをどんな風に人に紹介するんだろう。

「僕の妻です」なんて言うのかしら。

「きゃは！ 妻だって……」。

自分で考えながら照れてしまうほど、亜紀子は幸せの絶頂期なのだ。

「さあ、着いたぞ。心の準備はいいか！」

「万全よ。ここにある家、全部見てやるから」

「気に入った家があったら言うてくれ。どれでもいいぞ。亜紀子が好きな家を買ってやるさ」

「そんなこと言うて！ まだまだ先の話でしょ。五年か、十年か。

いつになることやら……」

二人は声を出して笑った。

もちろんこの展示場で気に入った家があるからといって、「おばちゃん、これちょうだい！」なんて、駄菓子を買うようなわけにはいかないのだ。

まだまだ頭金になるほどの貯金があるわけではない。いや、ない

わけではないが、二十五歳のサラリーマンの収入では、頭金に貯金を回してしまうと、後々の生活が心配なのである。少しは蓄えを残しておかないと……。

「私が共働きすれば、少しは早くなるんだけどね」

亜紀子はよくそんなことを言っているが、マイホームの前にどうしても欲しいものは、やっぱり……。

「働きながらじゃ子育てはできないよ。せめて幼稚園に行くまではそばにいてあげないと」

最近の伸介は、こんなことを口にするのが多くなった。結婚、家庭ということが現実味を帯びてきたのだろう。

亜紀子はまだ会社を辞めたわけではないが、いずれ辞めざるを得ない。二人が勤めている会社は、社内恋愛には厳しいのだ。この結婚も、伸介が所属する営業部長の力添えがなかったら、今ごろどうなっていたことが……。

もちろん「出来ちゃった結婚」ではない。子供の出産は結婚してから、十月十日以降と決めてある。ハネムーンベイビーなら最高だろう。かといって、「仕込み」をしていないわけではない。そこは恋人同士の……。

「結構いろんな家があるもんだな」

三軒、四軒と見ていくうちに、二人の家を見る目が少しずつ変わってきた。

「日本古来の家が少なくなった、っていうのも、寂しいものね」

「瓦屋根も少ないし、縁側がないってのもつまらないよな、日本人として」

縁側でお茶を飲みながら日向ぼっこをする。もちろん膝には大きな猫。これが日本人の基本的スタイルだ、と伸介は半分まじめに思っているのだ。

それにしても、日本の土地は狭くなっていくばかりなのに、ここにあるモデル住宅は大きな家が多い。核家族が進んでいる世の中で、マンションの建設が盛んである現在、一戸建の家に住むことは、

庶民にとって夢のような話なのである。

また反対に、両親と同居する二世帯住宅も増えてはいるが、現代社会の細胞分裂のような気がして購入する気になれない。しかしこの展示場は、社会の流れに乗ったモダンな二世帯住宅がメインになっていた。

並んでいる展示住宅から少し離れたところに建っている家に眼を留めて、伸介は指をさして言った。

「ほら、俺が探していた普通の家だ」

モダン住宅とは言いがたい小さな家が建っている。新築とは思えない、古ぼけた感じの造りだ。どうみても中古住宅、しかも三十年以上は建つていそうな家をリフォームしたような趣があった。

「今どき珍しいわね。私が子供のころ見たような家だわ」

他の展示住宅には客もまばらだが、そこには多くの見物客が集まっていた。

民家？とも思ったが、建築業界の社員と思われるネームプレートを付けた案内人がいるから間違いないだろう。

その家に近づいてみると、「幸福の家」と書かれた小さな看板が立っていた。

「この家に住んだら、幸せになれる、ってことかな」

伸介は呟くように言った。

「金のなる木、みたいなもので、その気にさせるネーミングなのよ、きつと」

亜紀子は至って呑気だ。

「言葉による暗示だよな」

と伸介は言ったものの、何かが気になっていた。「でも、こんな古ぼけた家に住んで、幸せっていえるのかな。大した設備もないよっだし」

そう言つて、首をかしげた。

伸介の理想に近い家である事には違いないが、それはあくまでも望郷の念に等しいものである。実際に生活するための家は、やはり

近代的な住居を選んでしまうのだろう。

「気は心！ 住めば都っていうじゃない」

「亜紀子はこんな家でもいいのか？」

「そうじゃなくて、ほら……」

亜紀子が指をさした所に、この家の販売価格が提示されていた。

「嘘だろ！」

確かに古ぼけた家ではあるが、その価格はファミリーカーどころか、軽自動車が一台中買えそうな値段だ。今どき中古住宅でさえこんなに安くはない。

「きつと何かの間違いなのよ。それとも頭金だけとかさ」

「そうじゃないよ。ちゃんと書いてあるじゃないか」

「でも……」

「きつと何か欠陥があるんだ。雨が降ったら傘を差して寝なきゃいけないとか、風が吹けば桶屋が儲かるとか……」

と伸介は、わけの分からないことを言っている。

「落語じゃないんだからね、もう！」

二人は笑った。

なんだかんだと言いながら、結構二人は楽しんでいるのである。それにしても、外には人がたくさん集まっているというのに、この家の中には人影が見当たらない。そこにいる人々は、建物の外観だけを楽しんでいるのだろうか。

一組の夫婦と思われる二人連れが、玄関先にいる案内人と話しをしていたが、何か悩んでいるように首を振っている。そして中には入らず、再び人垣の中へと吸い込まれていった。

「誰も中に入らないみたいね。どうしたんだろう」

亜紀子が不思議そうにその家を覗き込んだ。

「興味が無いんだよ。今どきの家じゃないからな」

「でも、こんなに人が集まっているわよ」

「何かあるんだろ……」

しばらく様子を窺っていた伸介は、「よし、入ってみるか！」

と言って、二人で玄関から入ろうとした。

「ちょっと待って下さい」

案内人が、愛想笑いを振りまきながら二人を制止した。

「見学させてもらってもいいんでしょう？」

亜紀子がそう訊くと、

「中に入る前に、説明しておくことがあります。ここは普通の家じやありませんからね」

何となく意味ありげな案内人の言い方だ。

「普通じゃない……と言いますと？」

「見ての通り、モダンな造りではありませんよね。狭い部屋に大家族がひしめき合って暮らしていた、昔を思い出すような家でしょう」

「確かに僕が子供のころ、住んでいた家に似てはいますが、それが……」

伸介は、玄関口から家の中を覗いてみた。やはり内部も昔を思い出すような造りだ。

「この家は、幸せになる人しか住むことができないんです」

案内人の平然とした言い方に、伸介は一瞬その言葉が理解できなかった。

「誰だって幸せになりたいと思ってるんじゃないですか。そのために、一つの家に家族で暮らすんですから」

「しかし、離婚件数が増えている昨今、家族を顧みないで家庭を崩壊させるような人が増えているのも事実です。最初は誰でも幸せになるうと努力しますが、しだいに気持ちも肉体も離れていくのです。したがって……」

「ちょっと待ってよ！」

亜紀子は憮然として、「私たちは幸せなの。それに、ここに集まっている人たちだっただってそうだから、家を買おうと思っただけで来てるんじゃないのかしら」

離婚件数が増えたからといって、今から結婚しようとしている人たちには迷惑な話でしかないのである。せつかくマイホームを、と

思っているのに、出端をくじかれるようで亜紀子は面白くなかったのだ。

「いや、失礼しました。もちろん幸せになる自信があれば、何も問題はありません。幸せであれば、いつでもこの家から出ることが出来るんですから」

と、案内人は言った。

「はい？」

伸介は戸惑った。「出ることが、って……」

「この家は、幸せじゃない人を、又は家庭を壊そうとする人を飲み込んでしまうのです。もちろんこの展示会場もそうです」

「そんなばかな。どうやって飲み込むんだよ」

伸介は笑いながら言った。お化け屋敷じゃないんだから……。

「それは私にも分かりません。それでよければ、いつでも家の中をご覧になってください。もしあなたがこの家から出られら、生涯幸せな家庭を築くことになるでしょう」

伸介と亜紀子は、呆れたように、言葉もなく見つめ合っていた。

しばらく考えていた二人だが、伸介は何も言わないまま玄関に足を踏み入れた。そして、晒いながら靴を脱いで、

「お邪魔させてもらいますよ。僕たちがどれだけ幸せなのか、確認しないとね」

伸介はそう言って亜紀子を呼んだ。

「補償はしませんよ……。無事に出てくることを祈ります」

そんな怖いことを言いながら、営業スマイルで伸介を見ている案内人の方が、何やら不気味に思える。

「もちろん家の中を案内してくれるんでしょう？」

と、亜紀子が訊くと、

「私の案内はここまでです。後は、あなたたちが出てくるまで、誰も家の中には入りません。二人で将来のことを話し合ってください。

では、ごゆっくり」

案内人とは名ばかりだ、と伸介は思った。

玄関で靴を脱いでスリッパに履き替えた二人は、ゆっくりと「幸福の家」の中に入って行った……。

## 第二章

外観は小さく見えても、中に入ってみると意外と広く感じるものだ。

二世帯住宅に囲まれているから余計にそう見えるのかもしれないが、二階建てになっているその家は、予想外に部屋数も多いようだ。玄関からまっすぐに伸びている廊下を歩いてみると、左手にはガラスサッシを隔てて縁側があり、その先には小さな庭がある。サッシはいつぱいに開け広げられて、爽やかな空気が二人の身体を通り過ぎていくようだ。

「明るくて気持ちいいじゃない。新しい畳の匂いがするわ」

亜紀子はそう言って深呼吸した。

「これなら俺たちが住んでも恥ずかしくないよ。十分に住み応えあるんじゃないか。しかもあの値段だからな」

「ほんとね。でも……」

亜紀子は何か言おうとしてためらった。

「どうしたんだよ」

「なんだか気になって。さっきの案内人さんの言葉……。人を飲み込むって、どういうことかしら」

「あんなの嘘っぱちに決まってるじゃないか。そんなことあるわけないだろ」

「でも……」

「売れないからあんなこと言って、気を引こうとしてるんだよ。馬鹿らしい」

と、伸介は笑い飛ばした。

「そうね、そうよね。それに私たちって、充分幸せだもんね」  
亜紀子はふふつと笑って、伸介の腕を取った。

右手には割りと広い和室が二部屋つながっている。障子を開けてみて、

「結構広いわね！ これならお客さんが来たって大丈夫だわ」

亜紀子は至って冷静に見学している。

「一昔前だったら、豪邸のうちに入るんだらうね。外からじゃ分からないよな」

伸介はスリッパを脱いで畳の部屋へ入った。

「本当に懐かしいわよね。私も子供のころ、客間に友達をたくさん呼んで遊ぶのが好きだったもの。私たちが結婚しても、大勢友達が集まるような部屋が欲しいわ」

「でもあまり集まると大変だぞ。付き合いは外でしないとな」

「あら、だって誰も来ない家なんておもしろくないわ。みんなに喜んでもらえるような家庭にしたいんだもん」

亜紀子の願望だ。

「人のために家を建てるんじゃないぞ。いかに俺たちが暮らしやすいか、満足な生活ができるかということが大事じゃないのか」

伸介の表情が、少し硬くなったようだ。

「でも、自分たちだけで暮らしていくわけじゃないと思うわ。友達だってたくさんいるんだから。それに子供ができれば……」

「あんな！俺は」

カチツ……。

突然、どこからか物音がした。乾いた金属音のようにも聞こえる。

伸介は辺りを見回してみたが、誰か家の中にいるわけではない。

この建物の中には伸介と亜紀子だけしかないはずだ。

「何か、音がしなかった？」

亜紀子が不安げに言った。

「うん……。いや、気のせいだろ」

「そうかしら。そうね、メーターか何かの音かもね」

肯きあつた二人は、気にする風でもなく、奥の部屋へと足を進めた。

和室の奥に入っていくと、キッチン、というより炊事場と言った方がピッタリの古風な台所。今でいうシステムキッチンと違って、

簡単な流しと食器棚が置いてあるだけだ。

「電子レンジとか置く場所あるの？」

「ちよつと狭いかなあ」

伸介が台所を見回しながらそう言った。建物が大きい割には少し狭いようだ。

確かに昔の家は、ダイニングルームと呼ばれる場所なんてなかったように思える。食事のときは、台所で作った料理を居間に運んで家族で語り合いながら食べたものだ。もちろん兄弟げんかのおまけつきで……。

「ちよつと見てよ。ほら、冷蔵庫があるわ」

モデル住宅だ。最低限の家具や調度品は置いてある。

「今どきワンドアの冷蔵庫なんて滅多にないぞ。中の冷凍庫もこんなに小さいんじゃ、食料のストックもできないよ」

「冷凍庫は絶対に必要よね。レトルト食品に電子レンジ、これからの家庭の必需品よ」

亜紀子は料理が嫌いというわけではない。もちろん自慢の料理だつて数多くあるが、世の中のレトルトブーム、これを見逃す手はない。子供が産まれたら料理に集中できないかもしれない。それに家庭が落ち着けば、いつか自分も仕事を……と思っているのである。

「俺は亜紀子の手料理じゃないと食わないぞ。レンジでチン！ そんな飯が食えるか！」

つい怒鳴ってしまった伸介だが、まだ亜紀子の作った料理を食べたことはあまりなかったのだ。

「何をそんなに怒ってるのよ」

「怒ってなんかないだろ」

「怒ってるわよ！ その言い方……」

「これから俺たちは新しい生活を始めようとしてるんだぞ。言いたいことがあつたら最初っから言った方がいいだろ。それだけだ」

カチッ……。

また音が聞こえて、二人の視線が重なった。さっきの乾いた金属

音のようにも聞こえるが、今度は少し鈍い音だし、場所も違つようだ。

しばらく二人は沈黙していた。

「案内人の奴、誰も中に入れないなんて言つといて、嘘ばっかりじゃないか」

伸介がぼやいた。

「仕方ないわよ。他にもお客さん、たくさんいるんだから」

亜紀子としては別に案内人を庇うわけではないが、この家に入つてからの険悪なムードと、案内人が言っていた非現実的な話しに気がなりだしていたのである。

ここ数年お付き合ひをしている伸介は、他愛もないことで怒るようなことなんてなかったのだ。

いつもの伸介と違う。この家に入つてからおかしい。

亜紀子は底知れぬ不安を抱き始めていた。

「二階に上がってみるか」

伸介は話題を変えようという思いがあつてのことか、ポツリと小さい声で言った。

二階に上がるための階段は、玄関のすぐ横にある。二人は台所から、最初に入った和室を抜けて、廊下に出た。

伸介が階段に向かって歩こうとすると、

「ちよつと待つて！」

と、亜紀子が呼び止めた。

「どうしたんだよ。トイレか？ 確か、台所の横に」

「そうじゃなくて……。ほら、廊下のサッシが閉まつてるわ。さっきまで開いていたのに」

亜紀子は立ち止まつたまま、ガラスの向こうを凝視していた。

小さな庭になつていているその場所には、人がいる気配は全くない。そういえば玄関前からロープが張られ、受付を通らないと入ることができないようになっていたはずだ。

案内人が言つていたように誰も入らないとなれば、この庭にも入

つてくることはできない。

「閉まっけていてもおかしくはないだろ。外には人がたくさんいるんだから」

「どうして閉めなくちゃいけないのよ。そんな必要ないじゃない」

「俺たちに関係ないよ。持ち主が閉めたかっただけなんだろ。勝手にさせとけ。ここは俺たちの家じゃないんだぞ」

つい怒鳴ってしまった伸介だが、内心不安を感じていたのは事実だ。サッシが開いていたのは、伸介の肌がよく憶えている。部屋の障子は開け放してあるし、台所から和室を通して廊下のサッシも見えていたはずなのだ。しかし、人がいた気配など、微塵も感じていなかった。

「ねえ、おかしいと思わない？ この家に入ってから、伸介さん、なんだか怒りっぽくなってるし、私も何となく変な感じがするの」

亜紀子はそう言っけて、サッシを開けた。

さっきまで爽やかにそよいでいた風は、今はもう止んでいた。

止まっている。風が、いや、何かが止まっている……。亜紀子はなぜか、そんなことを考えていた。

「ごめん、そんなつもりじゃないんだけど」

伸介の声はなんだか小さく聞こえる。

「もしかしたら、誰かが閉めたんじゃないのかもしれない」

「と言っけて？」

「この家が……。だっけて案内人さんが言っけてたじゃない。家が人を飲み込むっけて……」

真剣な亜紀子の言葉を聞いていた伸介は、突然笑い出した。

「ばかじゃねえか！ まだ信じてたのかよ、そんなこと。家が自分で勝手に動いたたでも言っけてのか？ 未来の家じゃないんだ。昔の家なんだよ。叩いても動かないようなね」

「だっけて……」

何か言おうとした亜紀子だが、このままではまた言い合っけてになっ

てしまうのは目に見えている。

伸介は背中を向けると、玄関の横にある階段に足を伸ばしていた。慌てて亜紀子が追いかける。

「待ってよ!」

狭い階段をゆっくりと上って行く二人の耳に、また何かか聞こえていた。

カチツ……。

### 第三章

至って平凡な六畳間の和室が二部屋。各部屋小さな押入れがあるだけで、室外のベランダがつながっている何の変哲もない部屋だ。

太陽の光を一杯に吸い込んだその部屋の窓は閉まっている。何となく気になった亜紀子は、すぐさま近寄ってその窓を開けた。

「子供部屋にいいわよね。もちろん大きくなってからだけだ」

亜紀子は結婚が決まってから、いつも子供が産まれた後のことを考えていた。

「二部屋ということ、やっぱり子どもも二人、ってことか」

「そうとは限らないわよ。私はたくさん欲しいわ、伸介さんの子供が」

「あんまり無理を言うなよ。身体は年をとっていくばかりなんだから」

そう言って伸介は自分の腰をたたくと、二人は声を出して笑った。伸介とてこの歳になると、自分もそろそろ子供を、と思っている。

同級の友人たちは結婚している奴も多いし、その子供たちも伸介のことを「おっちゃん」と呼び始めているのだ。「おっちゃん」にはいささか抵抗はあるが、小さな子供からそう言われると、つい顔をほころばせてしまうのである。

開けた窓から外を見下ろしていた亜紀子の顔から、少しずつ笑みが消えていく。

「ねえ、伸介さん。もう帰りましょうか」

外を凝視したまま、亜紀子がそう言った。

「どうした、もう退屈したのか」

「ちよつと来て。ほら、見てよ……」

この家の周りには、さつきまで集まっていた人数よりも、はるかに多くの人々で埋め尽くされている。そして全員がこの家を、まるで異性人でも見るかのように硬い表情で見つめていた。

「やっぱり何かあるのよ、この家。早く出た方がいいわ」

亜紀子はそう言つて窓を離れると、階段に向かつて歩き始めた。

「待てよ！　せつかく来たんだ、よく見ていこうよ。あの連中だつて、珍しい家だから集まつているだけなんだ。気にするなよ」

伸介はそう言つて、亜紀子の肩に手をかけた。

「あの案内人さんが言つたのは、間違いないのよ！」

「どうしたんだよ。なにをそんなに……」

「あの人たちは、私たちがこの家に飲み込まれる瞬間が見たいのよ。そつでしょ！　人の不幸ほど面白いものはないわ」

亜紀子は、睨むように伸介を見ていた。

「まだそんなこと言つてるのか！　そんなばかな話があるわけないだろ。いいかげんにしろ！」

と、伸介は怒鳴りつけた。

バシツ！

亜紀子を殴つた音ではない。さつきから聞こえていたあの奇妙な音が、更に不気味さを増して、地鳴りのように響いてきたのである。「ほら、聞こえたでしょ。やっぱりそつなのよ」

今度ばかりは伸介も否定はできない。しかもその音は、しだいに近づいているような気配さえしていた。

「何の音かな……」

伸介の顔に、焦りの色が浮き出ている。気のせいでもなければ、何者かの仕業じゃないことは明らかだ。

「ねえ、帰りましょ。いつまでもいないほうがいいわ」

「大丈夫かな。出られるのかな……」

「廊下のサッシを開けて来たばかりよ。まだ間に合うと思うわ。早く行きましょ！」

いつまでも動けずにいる伸介の手を引いて、亜紀子は階段を駆け下りた。伸介は足と階段のリズムが合わず、一階に到着する寸前で転んでしまった。

真つ先に目指したのは、もちろん玄関。二階に上がるときはまだ

開いたままだったのだ。

亜紀子が玄関のノブを？んで押してみたが、ドアは硬く閉ざされてびくともしない。

「誰か！ 誰か開けて下さい！」

そう叫びながらドアを叩いてみたが、表からは何の反応もない。

「亜紀子、こつちだ！」

伸介は叫んで、廊下に出た。 やはりサツシは閉まっている。

再び内側から掛けられている鍵を外して開けようとしたが、そのサツシは伸介の言うことを聞かなかった。

「ほら、だから言ったじゃないの。私たちを飲み込もうとしているのよ。もう逃げられないかも……」

亜紀子は落胆しかけている。

「そんなこと言ってる場合じゃないだろ！ 開いているところを探すんだ！」

「もうだめよ、全部閉まつてるわ！ 出られないのよ、この家から」「いいから探せ！」

伸介は怒鳴りながら、台所へと走っていった。勝手口があったはずだ。もちろん開かないとは思いが……。

勝手口どころが、台所の窓も和室の窓も、ましてや換気扇の排気口までもが、まるでコンクリートで固められたように閉ざされている。

パシッ！ パシッ！

得体の知れない音が、いつの間にか無数に聞こえていた。隣の部屋かと思えば階段を通して二階から聞こえたり、壁の向こうの外からも、まるでこの家が凝縮でもしているような震動が伸介の体に伝わり始めていた。

「亜紀子！ 玄関に行け！ ドアを叩いて助けを呼ぶんだ」

そう言いながら振り返った伸介だが、亜紀子の姿はどこにも見えない。今までそこにいたはずだ。

和室を抜けて廊下に出た伸介は、

「何してるんだよ！」

座り込んだまま放心している亜紀子に怒鳴りつけた。

「やっぱり本当だったんだ……。この家に飲み込まれるのよ、私たち……」

亜紀子の声は震えている。うつすらと涙さえ浮かべていた。

伸介は亜紀子の腕を取って立ち上がらせると、玄関に向かって歩き始めた。

「落ち着け。いいか、外には人がたくさんいただろう。俺たちが危ない目に遭っているんだ。誰かが助けてくれるはずだ」

「でも……」

「いいから叫ぶんだ！」

伸介は開かないドアを叩き始めた。

「誰か！ 誰かいるんだろう！ 開けてくれ、助けてくれ！」

そう叫んでみても、全く何の反応もない。「亜紀子、お前も一緒に叫べ！ 亜紀……」

亜紀子は廊下突つ立ったままだ。そして冷ややかに伸介を見つめていた。

「むだよ、そんなことしても。誰も助けはしないわ」

亜紀子の声は小さかった。そして今まで伸介が聞いたこともないような冷たさを感じられる。

「この家は私たちを飲み込もうとしてるのよ。案内人さんが言った通り、もう出られないのよ」

「何をばかなことを言ってるんだ」

「つまり私たちは、幸せじゃないってことなの。そうでしょ、幸せならこの家から出られるって案内人さんが言っていたじゃない」

「いい加減にしろ！」

思わず伸介の手が亜紀子の頬を叩いて、乾いた音が家の中に響いた。もちろん今まで手を上げたことなんかない。喧嘩もしたことがなかったのだ。

亜紀子の頬が上気した。

「やっぱりそうなのよ。伸介さんて、そういう人だったのよ！」  
と叫びながら、亜紀子は手に持っていたハンドバッグを力任せに投げつけた。

その途端、台所から、爆発音のような大音響が聞こえた。

ここはどこだろう。俺は何をしているんだ？

分からない。一体何が起こったのか……。

爆風が玄関まで達したときまで、伸介ははつきり覚えている。台所から大きな風と共に、小物や雑貨までが伸介と亜紀子の体に降り注いだのだ。

しばらく気を失っていたのだろう。伸介が頭を起こしてみると、部屋中に物が散乱して、まるで竜巻でも通り過ぎて行った後のようだった。

「うーん……」

呻き声が聞こえて、伸介は我に返った。

「亜紀子……亜紀子！ 大丈夫か！」

倒れた襖の下から、その声は聞こえてきた。慌ててその襖を持ち上げると、亜紀子がそこに横たわっていた。

「亜紀子、しっかりしろ」

そつと頭を持ち上げる。

「伸介さん……、何が……何があったの？」

亜紀子も気を失っていたようで、伸介の声でうつすらと眼を開けたのだった。

「何がなんだか分からない。どこかで爆発があったらしい」

「爆発？      ということは、私たち、助かるのね」

亜紀子はちよっぴり微笑みながら言った。

「助かる？」

「だって、爆発音が聞こえたら、誰かが助けに来てくれるはずじゃない。あんなに人がいたんだから」

それもそうだ。あんなに凄まじい音がしたのだから、誰も来ない

はずがない。警察や消防だって……。

しかし……。

伸介が気がついてから、しばらく時間が経っている。部屋の中には静けさだけしかなかった。宇宙空間にいるような、時間も音も存在しない、無限の世界が広がっているだけだ。

「まんざら嘘でもなさそうだな」

と、伸介が呟く。

「何が？」

「案内人の言葉さ。俺たちを飲み込む、っていう話。誰も助けに来る気配もない」

伸介はそう言っ、部屋の中を見渡した。そこはさっきまで見ていた古風な部屋ではない。爆風で散らかってはいるが、壁や天井が今にも迫ってきそうな、目には見えない力が漲っているように、伸介は感じていたのである。

「私たち、どうなるのかしら……」

亜紀子の不安に満ちた小さな声が、伸介の耳に聞こえると、

「心配するな。必ず俺が出してやる」

と言っ、伸介は立ち上がった。

しかし、玄関を開けようとしてもダメ。サツシの頑なに閉まった力は、更にパワーアップしていて、押してもひいてもビクともしない。

と、何気なく外を見ると、いつの間にかその庭に大勢の人が入り込んで、部屋の中を凝視していたのである。

「何だあいつら！俺たちを見て笑ってやがる……」

伸介はサツシのガラスに張り付くようにして、その人ばかりを見ていた。

「お願いします！誰か、誰か助けてください！」

亜紀子も立ち上がっ、ガラスを叩き始めた。しかし、それも長くは続かない。庭で見ている人たちの顔が、伸介と亜紀子の姿を見て、さらに明るい笑顔になったのである。指をさしながら、笑

い声さえ立てている人もいた。

「お前ら、何笑ってるんだよ！俺たちは動物園の猿じゃないんだぞ！」

伸介は大声で叫ぶと、いったん部屋の中を見渡して、台所へと走っていった。すぐさま戻ってきた伸介の手には、木製の椅子が握られていた。

「どうするの、それ」

と、亜紀子は訊いたが、

「うるさい！お前は黙ってる！」

と伸介は言っつて、その椅子を力任せにサツシのガラスに叩きつけたのである。

普通のガラスなら、粉々になっつていっるだろう。しかしある程度予測していたが、その期待が見事に裏切られたことは、伸介の手に残った痺れが痛いほどに証明していた。

「ふふ、ふふふっ はははっ……」

亜紀子の鈍い笑い声が、伸介の耳に聞こえた。振り返つてみると、亜紀子は座り込んだまま伸介を見ている。笑いはしたが、その表情は凍り付いていた。

## 最終章

「どうしたんだよ」

「ふふっ……、おかしいのよ」

「何がそんなにおかしい！」

「だって、私たちって、檻の中の猿なのよ。伸介さんがやってることでだって、あの人たちから見れば、餌が欲しくて暴れているような猿にしか見えないってこと」

亜紀子はそう言っつて、またフフツと笑った。

「猿で結構！ 猿の社会にも、モラルやマナーがあるんだ。上下関係だって絶対的なものだし、子供を守る母親の愛情は、人間以上なんだぞ。そこで笑っている小汚い人間とは違うんだよ！」

伸介はそう言っつて、また椅子を投げつけた。今度はガラスを割ろうというのではなく、その人間たちに伸介の怒りをぶちまけたかったのである。

椅子は見事に壊れてしまった。

音が聞こえる。さっきまでの響くような音ではない。地面から、いや、家全体が地底から叫ぶような遠い振動となっつて、二人の体に伝わり始めていた。

「ほら、来たわ。やっぱり私たち、潰されるのね……」

「何を呑気なこと言っつてるんだよ。考えてくれよ、俺、このままじや終わりにたくない……」

伸介はそう言っつて、頭を抱え込んだ。

「ほら、いつもそうなのよ。何かあると私ばかり当てにして、自分じゃどうにもできないのよ。デートの場所も、食事の場所も、着て行く洋服だつて私任せ」

「当たり前じゃないか！ 俺は家庭を守る、そしてお前は俺の身の回りの世話をする。そうやって家庭は成り立っつていくんだよ」

「私は家政婦じゃないのよ！ 男女平等の世の中なのよ。私だつて

仕事も」

突然、二階から爆発音が聞こえた。天井から木片や埃が飛び散る。伸介はとっさに頭を庇ったが、亜紀子は微動だにしない。

「二人で言い合っている場合じゃないぞ。この家の目的は何なんだ！」

伸介はうろたえて、部屋中にある置物や調度品などを、ガラスに向かって投げ飛ばした。しかし、まるで強い磁石に反発するように跳ね返ってくる物体は、伸介たちに降り注いでくるのだった。

「もうだめよ！ 私たちはこのまま死んじゃうのよ！」

亜紀子は悲鳴にも似た叫び声を上げた。

メリメリツ！ と言う音と共に、和室の床が抜けて畳が落ち込む。壁は崩れ、家の骨組みがむき出しになった。

天井が割れてヤリ状にとがった板切れが、亜紀子の体を目指して落下しようとしている。その板切れが天井から離れた瞬間、伸介はとっさに亜紀子を突き飛ばしていた。

「何するのよ！ どうして私を……！」

「もうやめろ！ まだ分らないのか！」

伸介はそう叫ぶと、降り注ぐ瓦礫から亜紀子を守るように抱きとめた。

「何を……何を分かって言うのよ。この家が潰れていくこと？ それとも私たちが死んでいくこと？」

「そうじゃない。案内人の言葉を忘れたのか。幸せじゃない人を飲み込むっていう話。この家に入ってから喧嘩ばかりじゃないか。だからこの家は、俺たちが幸せじゃないと判断したんだ」

伸介がそう言っている間も、家の中は変貌を繰り返している。というよりも、この家が沈んでいく、地中に家ごと飲まれようとしていることに、伸介は初めて気がついたのだ。

「幸せじゃない……！」

亜紀子は小さく呟いた。

「お前は幸せか？ 俺と一緒にいて幸せか？」

「だって、私……」

「俺は幸せだ。幸せだから、喧嘩もするんじゃないのか」

「幸せだから、喧嘩する……。そう、そうよね。私、気づかなかつた」

亜紀子は伸介を見つめた。「好きだからこそ、言いたいこともいえる。私、伸介さんに意見したの、初めてよね」

「喧嘩したって、言い合いになったって、俺たちは幸せなんだ。そうだろう」

二人が抱き合っている廊下の床が、一瞬ガタンと落ち込んだ。亜紀子を庇った伸介の背中に、天井から散らばった木屑が降り注ぐ。

「私、死んでもいい。伸介さんとだったら、私、幸せだもん」

「ばかやろう、死ぬもんか。だって俺たちこんなに幸せなんだぞ」

伸介はそう言って、「殺せるもんなら殺してみる！俺たちは幸せなんだ！」

と、家に向かって叫んだ。

揺れている。いや、震えているとでもいうべきか。今まで小刻みに繰り返していた爆発ではなく、その家全体がまるで二人を噛み砕くように揺らぎ始めたのだ。

「伸介さん……まさか私たち……」

亜紀子は怯えながら伸介の胸に顔をうずめる。

「亜紀子！俺のそばを離れるな！何かの間違いだ。俺たちが死ぬはずがない」

伸介は亜紀子を抱きしめて、「どこからでもかかって来い！本当の幸せを教えてやる！」

と言った途端、その家は激しく揺れ始め、あちこちから爆音が鳴り響いた。壁は砕け落ち、いつの間になくなった天井の奥に、二階のベランダが見えている。床が上下運動を始め、伸介は亜紀子を抱いて転がった。

床が落ちる。柱が折れて、まるで伸介を狙うように倒れて来た。

「亜紀子！」

逃げるすべを失った伸介は、力強く亜紀子を抱きしめた。

しかし……伸介の体に衝撃はない。たしか、柱が……。

いつからこうしていただろう。顔を上げてゆつくりと眼を開いた伸介は、その異様な空間に目を見張った。止まっている。まさに時間が止まり、砕けた柱や壁が宙に浮いたまま、伸介も目前で止まっているのだ。

亜紀子も目を開けている。そして、ただ呆然として伸介を見つめていた。

二人は何の言葉もなく見つめ合っていると、カラカラ、という音がして、その方向に眼を向けた。

「いかがでしたか？」

玄関がゆつくりと開いて、男が笑顔で入って来た。

「あなた方は、本当に幸せなようですね。安心しました」

男はそう言つて、「さあ、玄関が開きました。いつでも出られて結構です」

と、何事もなかったように、事務的な口調で言った。

伸介は男を怒鳴りつけようと思ったが、体も口もいうことを聞かない。亜紀子も伸介と同様だ。まるで夢の中にいるように、ただ自然としているだけだ。

「あんた……一体、何者なんだ」

と訊いた伸介の声は、小さくかすんでいる。

「私ですか。私はただの案内人です。人々の本当の幸せを探すため、この>幸福の家<を案内しているだけですよ」

案内人はそう言つて、微笑んだ。

「本当の幸せ……」

「さあ、外に出ましょう。あなた方の幸せそうな顔を見たがつている人たちが、大勢待っていますよ」

と言つた案内人の声が聞こえていたのか、二人の意識は、次第に薄れていったのである。

待ちに待ったウエディングベルが鳴り響く教会の階段を、ライスシャワーを浴びながら幸せそうに降りて来る二人の姿があった。純白のドレスに包まれた亜紀子の晴れ姿は、誰が見ても羨ましい限りだろう。

「幸せになれよ！」

「早く赤ちゃんの顔が見たいわ。それとも、もうお腹の中に入っているのかしら？」

「心配ないよ。こいつ、自分の子供だけで野球チームを作ろうと思ってるんだから！」

「やりすぎ注意！」

そんな強烈な祝福の歓声の中、二人は笑顔で応えていた。

「余計なお世話！ 俺たちの幸せは確認済みなんだから」

伸介は自信ありげに言った。

腕を組んだ二人の脳裏には、あの住宅展示場の出来事が焼き付いているのである。

あれからどうなったのか……。

> 幸福の家くで気を失った二人が目を覚ましたのは、意外にも公園のベンチだった。公園といっても、住宅展示場の中に設えられた簡易公園だ。家一軒分のスペースに、木製のベンチが一台あるだけだ。

「こんなところで寝ていたら、風邪を引きますよ。 お客さん」

ベンチの上で寄り添うように眠っていた二人を、展示場の警備員が起こしたのである。

静かに眼を開けた伸介は、狐につままれたような顔をして、辺りを見回した。

「ここは、どこ……」

亜紀子も気がついたようだ。

「あの……ここは、> 幸福の家くがあった場所じゃないんですか」  
伸介は警備員を呼び止めて訊いた。

「幸福の家……。何ですか、それ？」

「木造の古い家があったはずです、ここに。人もたくさん集まっています……」

「ここに？　いいえ、そんなものではありません。夢でも見てたんじゃないですか」

警備員は、そう言って笑った。

「私たち、ここで殺されそうになって……」

亜紀子もその家のことを話し始めて、警備員は小首をかしげた。

「あなた方は、本当に幸せなんですね。二人で同じ夢を見るなんて」と、警備員は笑って、「早く帰ったほうがいいですよ。喧嘩にならないうちにね」

ニヤリと笑った警備員は、背中を向けて歩き始めた。

しばらく呆然と見送っていた二人だが、

「あの男、どこかで見たことある……」

と、伸介が言うと、

「あの人、あの家の案内人さんよ。間違いない。やっぱり、本当にあったのかもしれないわ、>幸福の家<……」

亜紀子はそう言って、伸介に寄りかかる。

「いや、ないよ。なかつたんだ、そんな家なんて……」

と、伸介は言って、「さあ、帰ろう。そんなバカな話があるわけないんだ」

亜紀子の手をとって、二人は歩き出した。

公園を出ようとしたとき、足元に落ちていた板切れにつまずいて、伸介の体がよろめいた。

「ちよつと、気をつけてよ。たくさん子供を作らなきゃならない、大事な体なんだからね！」

「心配するな！　野球チームどころか、オーケストラを作ってる！」

照れ隠しなのか、伸介はそう言って笑った。

誰もいなくなった公園に、その板切れがポツンと残されている。

何十年も経っていきそうなその板切れには、かすれてしまった文字が、

ほんやりと浮き出していた。

しかし、そこに書いてある「幸福の家」という文字は、もう、誰にも読み取ることとはできなかつた……。

おわり

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0691p/>

---

マイホーム

2010年12月15日00時56分発行